

1. イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんな時にも決して渴くことはありません。(6:35)
 - a. モーセが燃える芝の中の主にお会いした時、モーセは神の名を尋ね、神は「わたしはある」とお答えになった。このイエスの「わたしはいのちのパンです」という宣言は、はるか昔モーセがした質問に対する神の答えの続きともいえる。
 - b. これはヨハネの福音書に記されている「わたしは・・・」で始まる宣言の第一番目である。他にも6つのイエスの自己宣言がある。「世の光」「羊の門」「良い羊飼ひ」「よみがえりでありいのち」「道であり真理でありいのち」「まことのぶどうの木」。
 - c. イエスがこの宣言をされたのはパンの奇蹟の翌日のことである。人々は霊的なむなしさを埋めるためではなく肉体の空腹を満たすためにイエスを求めてきたことをイエスはご存知であった。
 - d. これはいつの時代でも人々が神を求める時の問題だと思う。神はもちろん喜んで私たちを肉体的に満たし良いものを与えてくださるが、人生には私たちの感覚的な必要を満たすよりももっと大切なことがある。私たちの中には神にしか埋めることのできない神の形の穴があり、この世のものでその穴を埋めようとしている限り飢え渴きは続く。

2. しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと、わたしはあなたがたに言いました。父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。(6:36-37)
 - a. イエスはご自分が拒否されることを初めからわかっておられた。イエスに確信がなかったということではなく、父なる神が恵みをくださり彼らをイエスにお与えになるかどうかということであった。
 - b. イエスは拒否されるのを十分にご承知の上で、群衆に接し、食物を与え、御言葉を教え、奇蹟を行なわれた。ご自分が受け入れられようが受け入れられまいが、イエスは人々に喜んで仕え、ご自分を無にして与え続けた。いずれ彼らのご自分を否定するだけでなく「十字架につけろ！」と叫ぶようになることを知っていながら。

3. わたしが天から下って来たのは、自分のところを行うためではなく、わたしを遣わした方のみところを行なうためです。わたしを遣わした方のみところは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。事実、わたしの父のみところは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」(6:38-40)
 - a. イエスはなぜここまでなされたのだろう。イエスは認められるためのパン、人気者になるためのパン、称賛されるためのパンを求めておられたのではなかった。イエスが求めておられたのはご自分を遣わされた方、父なる神の御心を行なう、というパンであった。
 - b. また、一度否定されたからといって道が閉ざされたということではない、ということもイエスにご存知である。聖書を通して一度拒絶を受けた人が再び用いられる例はいくつもある。父親から拒否されたが神に選ばれたダビデ。イスラエルの民から拒否されたが神に選ばれたモーセ、などである。イエスも今は受け入れられなくてもいつの日かすべての者がひざまずき礼拝する日が来ることをご存知であった。